

必以歸復本姓爲學中第一之急務、其立志之確、雖似可貴、蓋於吾邦習俗、殆若不察、省時勢之緩急、與世變之處置者、自達士論之、不免其狹隘局量之譏、迂齋初年著再嫁說、養子論、辨駁之、沿從師說、○佐方至晚年大異其趣、不求備於人、婦女再嫁者、士夫出贅者、惡之不至已甚矣、

〔吉益東洞先生行狀〕先生諱爲則、字公言、安藝人也、其先出清和帝、姓源氏、管領政事、畠山長政之裔孫也、世襲封河內、紀伊二州五畿、悉屬麾下、曾祖高政之時、盡亡其封國、獨保河州高屋城、高政病而卒、其子政慶、幼弱不得立、傳之弟昭高、○中十八年、○天正熊野諸城皆降、政慶無置身之地、潛行走河州、匿於吉益半笑齋家、半笑齋者、畠山之族也、世業金瘡產科有名于世、謂之吉益流也、政慶懼誅、遂冒其姓、以醫自隱、○中元和五年、幸長野、○淺之子長晟、移封藝州、畠山之族、始徙廣嶋、政慶不往而死、其子政光、遂移廣嶋、居山口街、於是安藝侯使人勸出仕焉、政光善繼父志、不肯仕、以醫爲業、至是復其姓、曰畠山道庵、以寛文十二年而死、妾谷氏、生子男二人、長曰俊長、始五歲以故家人悉皆散、二子幼不能自存、以國奉寺主僧爲親戚收養之、由是俊長出家爲浮屠氏、妾谷氏養重宗於其父家、重宗者、先生之父也、及其長娶豫州松山侯臣中野氏之女、以元祿十五年五月某日、生先生於廣陵城下也、○中先生曰、我不能興吾家、今以醫隱、何汚本姓、復改吉益氏、

〔常憲院殿御實紀附錄下〕村上主殿正邦は、小性をつとめ、寵眷を蒙り、玄ばく加恩あり、本氏河合なれば、舊に復し度よし願ひけるに、上意、○徳川、に、村上は本氏に非れども、年頃となへ來り、家門も繁榮せし事なれば、これを嘉號と心得て、改めまじと仰られしなり、

〔南留別志〕藤原惠美押勝といへるは、姓を二つかさねたるなり、備前の王藤内、又安藤といふも同じ事なり、小河の系圖の内に、小河垣谷とかさねてなるあり、苗字をかさねたるためし、昔はあるなり、